５．おわりに

本 WG の最終年度（2009 年）は次世代スーパーコンピュータ計画にとって激動の年であった。5 月に日本電気がベクトル計算機部の開発からの撤退を表明したことは広く HPC 関係者にとって衝撃を与えた。ベクトル計算機実現の夢が潰えたことによる茫然自失(？)、官が進めるプロジェクトから民が撤退するという前代未聞(？)の事態、昔の栄華(？)を知る者にとっては感無量、などさまざまな想いが交錯する状況であった。救いは、富士通がプロジェクトの継続を力強く進めていること、敢えて言えば複数社による複数システムの開発というプロジェクトとしては必ずしも好ましくない桎梏から解放されたことか。

これだけに止まっていれば単に HPC コミュニティにおける「コップの中の嵐」程度の話題に過ぎなかったが、夏の衆議院選挙において下馬評通り政権交代が起き、これまでの官の事業を全面的に見直すとして実施された「事業仕分け」の俎上に次世代スーパーコンピュータプロジェクトが乗せられ、「来年度の予算計上の見送りに限りなく近い縮減」という評価を下されたことが大激震を起こした。“公開”事業仕分けのあり方についてはさまざまな意見があるものの､テレビで実況中継されたこの報道によりスーパーコンピュータや HPC という言葉が人口に膾炙するようになり、一般国民にまで知名度を広げたことは瓢箪から駒の宣伝効果であった｡またプロジェクトの凍結を避けるために HPC 関係者が総動員されてその必要性、有用性を一般国民も含めて訴えかける行動にでたことは目を瞠るものがあった｡SS 研にあっても 2009 年度の合同分科会終了後に緊急アピールの記者会見を開いた｡この年の合同分科会開催地が、次世代スーパーコンピュータが整備される神戸市だったこともあり地元での関心も高かった。

禍を転じて福と為す。これまでは、ややもすれば研究者の唯我独尊の世界に陥りがちであった HPC 社会も改めてその足下を見直し、何をどのように通じて世の中の役に立つのか、個々に問い直し実践する契機となれば幸いである。不安は「喉元過ぎれば熱さ忘れる」や「羹に懲りて膾を吹く」といった類の結果に陥らないか、である。志を大きく持つことがそのような弊害から逃れる道と心したいものである。

さて本題の当 WG 活動 3 年間を振り返ってであるが､当初目論んだ個別テーマの選定は活動期間中にでも随時にサブ WG 化して進めること、は必ずしも十全に実現することができなかった。報告書には 3 つのサブＷＧ報告が掲載されているが、やはり性能評価に重点がおかれ、性能評価という切り口を通じた「プログラミングモデルサブ WG」であり「ベンチマークジョブサブ WG」活動であった。これは一つには多くのサブ WG が立ち上がると事務局や報告者としての富士通の負担が大きくなることにも起因していると思われる。そのような意味から事務局機能の一部をユーザーが担ったり、報告者としてもっと積極的にユーザーが関わる、ということも考えなければいけないであろう。一方、報告書の内容については参加者各位の協力のおかげで SS 研会員各位の役に立つものであると自負している。会員各位の今後の活動に活用していただければ幸いである。

最後になるが、貴重な時間を割いて3年間のWG活動に参加して頂いた会員の皆さん、富士通の担当者、WGの円滑な運営に尽力して頂いたSS研事務局の皆さんに感謝する。

（HPC 技術 WG まとめ役　福田正大）